

---

# 説得までの四日間

ワタハウシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

説得までの四日間

### 【Nコード】

N5331D

### 【作者名】

ワタホウシ

### 【あらすじ】

サボリ大好きな少年を頭の固い少女が説得するまでの四日間を描く。

## （前書き）

私が学校の課題として書いたものです。短く拙いものですがお楽しみいただけたら幸いです。

午後一時、屋上にて

天文台がある人目に付きにくい高台でゆるりと過ごす昼下がり。あと十分程で鳴り響くだろう始業のチャイム、教室に戻る気など毛頭ない俺には全く以て関係ない話だが。

授業をサボるという行為において始業から十分間是我慢の時間だ。わずかばかり残った理性から滲み出る罪悪感に耐え、「今なら間に合う」という下らない正論を振り払うのだ。この葛藤を乗り越えた時、ひどく清々しい気分になるだろう。屋上に限らず屋外でその境地に達したら一度空を見上げてみるといい。天候に関係なく水からの小ささを目の当たりにすることでさらにすっきりとするはずだ。

「はいはい、そんなうんちく聞いても誰もサボらないから」

隣で女座り（死語？）しながら礼儀正しく弁当を食べていた女生徒が口をはさむ。

「残念だ。一回やれば病み付きになるのに……」

「なりたくないわよ！いい加減諦めて授業出なさい」

「そう急かすなよ、委員長」

「あんだねえ、誰のために……そもそも私はもう委員長じゃない！」

委員長こと米倉未来は高校二年次の文化祭準備委員会・装飾委員会における委員長であるが三年進級時にクラスメイトになってからも俺が呼び方を改めることはなかった。

というのも当時からサボリ魔として名を馳せていた俺は担任の陰謀によって強制的に（委員会の中ではトップクラスに面倒な）装飾委員に任命され、さっきの会話を聞けばわかるように少々頭のお堅い米倉にさんざんこき使われた。だから委員長イメージが脳内に焼き付けられても致し方ないだろう。

三年になっても頭に柔軟性が欠如気味の彼女は俺を授業に参加させようと努めている。実は最低限の授業には出席していて成績も平均は下回るものの落第するような点はとっていない俺を咎めようとする暇人はこいつくらいだが。俺達の関係はこんなところだ。

ところで屋上へと繋がる扉の上に位置するこの天文台は十数年前の天文部の廃部以来放置されていて中に入ることも出来ないが周辺の空間にいる人影をただ屋上に上がっただけで目視することは叶わず、そもそもこの死角の存在を知る者自体が少ないためサボるにはもってこいのスポットだった。

しかし最近、委員長がこの存在を知ってしまった。教室での説教のみならずともかく、今みたいに昼休みまで説得に來られるとさすがに面倒臭い。それにここまでしてくれと逆に申し訳ない気分になつてそろそろ折れてやろうかと思わないこともない。だがあっさりと掌を返すように真面目になつては興ざめだから、最後にちよつとした課題を委員長に課してみようと思った。

「なあ、委員長」

「委員長じゃないけど、なに？」

「ちよつとした賭けしない？これから俺が一つ質問する。その質問の答えが面白かったら授業に真面目に出る」

「唐突ね。つまらなかつたら？」

賭けという言葉が嫌いなんだろう、渋い顔で受け答えする委員長。

「うーん、そうだな……あつ、屋上に来るのをやめてくれ」

「なんで悩むのよ。……とりあえず質問とやらを聞かせて」

別に委員長と取引しようと思ってたわけじゃないからつまらなかった時のことなんか考えてなかった。

「委員長はなんで授業に出るんだ？理由をわかりやすく、期日は明日でどうだ？」

渋い表情を崩さずちよっと思案する仕草を見せて

「どうして急にそんなこと考えたの？」

と冷たく聞いてくる。怪しいのはわかるがそんなにカッカしないで欲しい。恐いから。だから俺は出来る限り穏やかな笑顔で答えた。下手に出てるわけじゃないぞ？

「俺は授業は性に合わないけどさ、別にアレルギー患者のアレルギー源みたいに絶対拒絶ってわけじゃないんだよ。委員長があんまりご執心だから俺もそろそろ出てもいいかな、なんて思っちゃったわけよ。けどどやっぱ面倒なもんは面倒だからやる気が出るような理由が聞きたい」

「……別に私に特別な理由なんかないわよ？」

「いいんだよ、素直に思うまま答えればそれは面白れえはずだから一口に面白いつて言っても色々あるからな。名作の映画の感想はフアンタジーでも恋愛でもホラーだって「面白かった」だろ？」

「無駄に説得力あるわね……他のことに活かせばいいのに。」

まあいいわ、受けましょう」

呆れたような、それでいて少し楽しそうに答えた。

「おし、じゃあ明日の昼休み、ここでな。今日は初回サービスで午後も出てやるよ」

「安心しなさい、これから毎日だから。それに私が説得を始めたのは昨日今日じゃないのに随分初回サービスが遅くない？」

「気にすんな。出るんだからいいだろ？」

「……まあね」

俺達はクスリと笑い合って教室に向かった。

いつ以来かわからない午後の授業はやっぱり面倒だったことは言うまでもない。

翌日、再び午後一時、屋上にて

「臆せず来たことは褒めて讃えよう、勇者よ」

「何の話？あんたって本当に楽しそうね」

ノリ悪いのはわかってたがやっぱり少し寂しいな。

「いい、長島。私が今から正直に昨日の質問に答えるけどこのことは他言無用、というか絶対漏らしちゃダメだからね！？」

そんなこと言われたら逆に広めたくなるのが人情だろ、といたいところだがせつかく包み隠さず話そうとしてくれているのに水を差すのもアレなんで緩やかな首肯で返す。それを確認した委員長は、すうつ、と静かに息を整え話始めた。

「私が授業を受ける理由は……特にないわね」

「はっ？」

なんだそりゃ。思わずマヌケな声を上げてしまった。

「とりあえず最後まで聞きなさい。次口出ししたら話してあげないからね」

口調はそれほど厳しくないもの鋭い視線で睨まれながら忠告を受けた。鳥も落としそうな眼光を前に逆らえるはずもなかった。

「……わかった」

「よろしい。」

さっき言った通り私は特定の理由を持って授業を受けてるわけじゃない。将来の夢は一応

あるけど絶対そうならなきゃイヤって訳じゃないの。先生は建前で言ってるかもしれないけど「将来歩ける道の候補を多くするために勉強しておけ」っていうのも正しいと思うし、もちろんお父さんとお母さんにもお金払ってもらってるんだけど授業を受ける理由かっていうと少し違う気がする。

それでも無理矢理理由を付けるなら……それが普通だと思ってるから。朝、目が覚める、ご飯を食べる、歯を磨く、学校に行く、授業を受ける、みたいな感じ。それが当たり前だと思ってるから。

「ただ昨日の質問の答えはやっぱり特に無しってことになるわね」

「……」

意外だった。あの堅物の委員長のことだから模範的な解答を用意してくるもんだと思ってた。まさかこんな投げやりというか雑というか、委員長らしくない不真面目な回答を持つてくるとは……やっぱり意外だ、心の底から。

「なんか反応しなさいよ。気まずいでしょ!？」

「……ありがとう」

「……どうしてお礼なの？」

「何かそんな気分だった。面白かった。委員長が少し身近になったよ」

委員長は一瞬頬を朱に染めて俯いたかと思うと、はっと何か思い出したように顔を上げて

「じゃあ授業には出るのね!？」

と声を荒げた。

「それは保留。まあ焦るな、とりあえず最後まで話を聞け」

当然ながら目で抗議してくる（口に出さないとこはさすがだが）委員長を俺は平然と流した。別に委員長をからかっているわけでも謀ったわけでもないんだが、もう少し話を聞いてみたくなった。

「もう一つだけ、聞かせてくれないか? つか教えてほしいんだよ」

「……なに？」

「俺が授業受ける必要あるのか？」

ずるい質問だと思う。だがもし今日みたいに斬新な答えを持って来てくれたら俺はすんなり授業を受け入れられるかもしれない。

「はあ? そんなこと知る訳な……あつ」

訝しげな表情を一変させ何やら思案顔。しばらく沈黙してから

「……ねえ、私ばかり譲歩を求められるのも不公平だと思わない



「だからあんたが私の言うこと一つ聞いてくれたら答えてあげる」  
一理ある。確かに俺は面白いって認めたわけだしこれは一種のわが  
ままみたいなもんだからな。だが委員長の言うことって……

「死なないよな？」

「……そんなことになったら元も子もないでしょうが」

冷ややかな声だった。言外の殺気を感じた。

「わかった。それでいい」

断れるはずなかった。正論だし、余計なことを聞いたせいで妙な圧  
力があつたからな。俺の答えに満足したのか、ニツコリと笑った。

「交渉成立ね。今日はちょっと忙しいから明日にしましょう」

「何がだ？」

「それは明日のお楽しみ。放課後ね、あんまり使わないと思うけど  
一応、ある程度のお金は持ってきてね」

「金つ何する気だよ」

「だから明日まで待ちなさいってば。さあ授業いくわよ」

恐すぎる。が、委員長が早目に話を切り上げ梯子から降り始めてし  
まつて問い詰めることを断念せざるを得なかった。

「いや今日はいいいよ、午後は単位多い科目ばっかだし」

「無駄に計算してるのが腹立つわね。いいから来なさい」

「まあまあ、明日は午後出るから」

「全くもう。今日だけだからね」

「はいはい」

明日は元から午前中だけサボる予定だったけどな。委員長が階段を  
下る音を聞きながら心の中で呟く。

それにしてもあまりに不気味過ぎる。明日俺は何をやらされるんだ。  
選択を誤ったかな。

不安は絶えなかった。

翌日、三時過ぎ、教室にて。

昼休みに午前の授業をサボったことでたっぷり御小言をもらったのは言うまでもないが今は放課後。

「さて、じゃあ行きましようか」

「どこに？」

まあ校内ではないだろうと思ってたが正直まったく予想できない。

「それは、えーと、デで、デッ、デート」

「はあっ？」

何だその古典的な噛みつぶりは……じゃなくて、今何て言ったよ！？

「私のお願い、これからで、デートして」

「……」

どうやら聞き間違いではないらしい。状況が飲み込めず完全に沈黙する俺に委員長が

「勘違いしないでよ、ちょっと、その……ストレス解消に付き合っ  
てほしいだけなんだから」

「わざわざ紛らわしい言い方すんなよ。焦っただろ」

「悪かったわよ。さあ行きましょ」

何なんだ、まったく。

「あっこれカワイイ」

学校からさほど離れていない商店街のとある雑貨屋。アヒルか白鳥の類であるう謎の水鳥が描かれたマグカップを手を輝かせる委員長。異様なようでしっくりくる不思議な光景だった。

この店に来る前は衣服をたっぷりウィンドウショッピングした。スキップしそうな勢いでコロコロ表情を変えながら服を見る姿は新鮮だった。いつもの厳格な委員長などどこかに飛んでいつてしまったかの如く米倉未来という一人の少女の一面見せつけられた。

「長島、何か面白いものあった？」

「そうだな……これとか」

キツネの顔を円形の携帯クリーナーにデフォルメしたものとか謎の魚（多分鯉だと思うんだが確証無し）のぬいぐるみなんかを物色してその店を後にした。何も買わないのも謎の宇宙生物？のキーホルダーを二つ買った。金が俺持ちなのはしょうがない……のか？

次に喫茶店で小休止。小一時間のんびり雑談タイム。始めはここ最近のサボり事情と今日の意味深行動について話していたが次第に昔話、俺達が唯一共有している文化祭準備の時の話へと移っていった。「なんか俺の仕事量多くなかったか？」

「ぐうたらな長島のことは風の噂に聞いてたからね。サービスよ」「だからって泊まりはありえないだろ。他の奴らは普通に帰ってたのに」

「私も泊まりだったわよ。それに当日は色々奢ってあげたじゃない」「さすがにな。つかあれで無償だったら本気で割に合わん」

「あとは達成感ね。人間的な成長が……見られないか」

「わざと聞こえるようにため息つくんじゃねえよ」

つて感じの馬鹿話を延々としていたせいで小休止のつもりが一番滞在時間が長くなってしまった。

三時間ほど居座ってさすがに店員の目が気になって来たところで店を出たものの歩きながらなお雑談に花を咲かせる俺達だった。ちなみにコーヒー代も俺持ちなのは言うまでもない……のか？

いつの間にか辺りは夜の帳に包まれていた。

「ああゝつ、遊んだなあ……うーん、ちよつと違うか。ああゝつ、話したなあ、かな？」

「確かに。俺はもう疲れたぞ」

二人して人目もはばからず大きな伸びをする。ってよく見ると周囲

には人っ子一人見当たらない。商店街の出口を少し離れていてかつ住宅街への道をわずかに逸れた、俺自身も滅多にこない道だった。俺達以外の人の気配はない、故に俺達が何も話さないとした夜の静けさが広がった。

「変わった所に出ちまったぞ」

「あれ、ここどこ？」

知らないんかい。まあ少し引き返せば見慣れた風景に戻るんだがな。

「そろそろ帰るか」

踵を返そうとすると

「待って」

と委員長に止められた。何となく雰囲気の違いに黙って立ち止まる。

「あのさ、今日最初に言った私のお願い覚えてる？」

「んっ？……私とデートしてってやつか？」

委員長の瞳からは明らかな不安と緊張が見て取れた。普段の強気から考えればそれだけでも不自然なのにさらにその中にある言い知れぬ熱を帯びた色があったことが俺の鼓動を少しだけ早めた。

「そう。でももうそれも終わりよね。つまりデートの締め括り。どうすればうまく幕を閉じられると思う？」

それだけ言つと委員長は俺を見つめた。俺も委員長を見つめた。見つめ合っているうちに先程委員長の瞳に見た不思議な熱がどんどん上がって来た。俺は磁力の上がっていく電磁石に徐々に吸い寄せられる磁石のように、ごく自然に唇を重ねていた。川の流れのように、海の流れのように、それが当然の摂理である言わんばかりの自然な動作だった。

委員長の柔らかさと暖かさを感じ取るだけの触れ合いだった。ただそれだけでどこか浮いているような気分になった。幕引きとしても十分だろう。

「ありがと。じゃあまた明日ね」

言うなり委員長は走り出した。俺はただ立ち尽くすのみだった。

えっと、ありがとって……そういうことだよな。でも委員長だぞ？だがしかし

昨日以上の悩みの種をもらって寝付ける気がしない帰り道だった。

翌日、早朝、屋上にて。

俺は近年稀に見る早さで学校に来ていた。昨日の夜から今日の明け方にかけて浅い眠りと起床を繰り返し、嫌気がさして学校に来た。今度こそ深い眠りに就こうと屋上に出て来たはいいが……

「……寒い」

この時間帯の気温を考慮してなかった。最近昼間はかなり温暖で週に数日は汗ばむくらいの陽気だったせいも忘れていたが所詮五月は春なのだ。

今ならまだ教室の方がのんびりできそうだ。どうせまだ誰も来ていないだろうし。というわけで高台に上ることもせず帰ろうとするとタンタンと梯子を降りる音がした。

「長島？随分早いわね」

委員長だった。確かに早いがそれはお前さんにも言えることじゃないかね。

「今イチ寝付きが悪くてな。誰かさんのことが頭から離れなかったんだよ」

「……とりあえず上がらない？落ち着いて話も出来ないわ」

この高台に上がるという動詞が適応されるのはさておいてもっともな提案なのでさっさと梯子を登った。

「ここで待ってて正解だったみたいね。」

「俺を待ってたのか」

「うん。さすがに私一人じゃここには来ないわね。基本的に立ち入り禁止みたいなものだし」

「それもそうだな」

俺自身ここで他人と鉢合わせたことがない過疎地域だもんな。立入禁止ではないが立ち入る必要が無い。

「じゃあ教えてあげるわね」

「何を？」

自然と出た疑問だった。

「何ってあんたが授業に出る理由に決まってるでしょ。最初からそういう話だったじゃない」

……えーと、全く以てその通りだが普通に考えればまず昨日の帰り際のことだろ。……まどろっこしいのは性に合わん。単刀直入に聞くか。

「なんで俺にキスなんかさせたんだよ？」

能動的に動いたのは俺だが誘ったのは間違いなく委員長だった。だがその問いに穏やかだった顔に

「……本気で聞いてんの？」

険しい表情で冷たく言い放つ委員長はどこか淋しげに見えた。

「あんた本当にわからないわけ？」

俺は静かに首を横に振った。

わからないはずなかった。幼稚園児じゃあるまいしスキンシップでキスなんか求めるわけが無い。

でも俺はどうせ冗談だってお茶らけると思ってた。委員長がそんなことできない堅物だとよく知っていたのに情けない。

委員長は淡々と語り始める。

「初めて文化祭であんたと作業してなんで噂になってるかわからなかった。今だから言うけどあの時あんたの仕事は少し多めにしておいた。なのに文句は言っても作業は真面目で丁寧だった。

それにね、装飾って範囲が広すぎるからあんまり人が入らないところは飾り付けもしないのが通例なの。一応委員長だったし私一人で出来るところまでやるつもりだったの。けど長島だけは泊まり込みにも付き合ってくれて。ちょっといいやつかもって思った。

まあ今年同じクラスになってサボりの実態を知ってから授業に参加させようとしたのは純粹に私の正義感みたいなものよ？

初めはそのつもりだったけどいつからかこのやり取りを楽しんでる私がいた。好きになっちゃったのかなって気付いたのはつい最近だったけどね。

私は恋なんかしないって思ってたけどこれでも一応女だから。やっぱりどこかで望んでたのかも」

そこまで言つと委員長はにっこりと穏やかに微笑んだ。何かを諭すようにというか少しからかうような感じで。

「まあ私はあんたに恋してるかもしれないけど愛には程遠いと思うわ。それどころかまだ単なる友情にも思えるの。……そうね、割合的には空気の中の窒素が友情、酸素が恋心で余りが愛情って感じ？自己評価だから信憑性は薄いけどね。

……だから付き合ってくださいなんて言わない。それにはまだ早いと思った。だけどいい機会だしせっかくだから伝えておくね」  
俺はどうリアクションをとればいいかわからなかった。話がやたら論理的なのはらしいっちゃらしいがいい機会って何がだ？

「私こと米倉未来は、あんたこと長島光一が好き。だから授業に出てよ」

「……」

好きだから授業に出ろ？俺の脳みそでは理解に苦しむんだが。俺の沈黙に再び委員長は口を開く。

「文化祭で気付いたの。長島って他人のためなら頑張っちゃう人だつて。そのかわり自分のことはからつきしだけだね。だからあんたのためじゃなくていい、私が長島と一緒に授業受けたいんだから。

……私を理由にしてくれない？」

ここまで沈黙を守り通して来たがいよいよ返答の時である。だがな、俺はあまのじゃくなんだ。

「……悪いが御免こうむる」

「……そうよね。当たり前か」

委員長の表情は驚愕と諦めの複雑なものだった。

そして俺は笑みを抑え切れない、いたずらっ子の顔になっていることだろう。

「残念だが人のレールに乗るのは真っ平御免だね。だから……俺と付き合ってくれないか」

「……えっ？」

まさに期待していた通りの開いた口が塞がっていないばかりとした顔で俺を眺める委員長。

「だから俺と付き合ってくれて言ったんだよ。

……確かに委員長の言う通り誰かのための方が頑張れる気がする。気のせいでもこの際かまわない。だから言ってみた、別に断られても好きなやつがいるなら授業に出るのも悪くないと思う。自分を好きなやつじゃなくて自分が好きなやつがいるならな」

これが俺の答え、委員長の勇氣に誠意をもって答えたつもりだった。「えっと、その、もちろんいいんだけど……付き合うの？」

「ああ、お前さえよければな。ちよっとずるいけど」

すでに告白まがいのことをされてるんだから卑怯といえは卑怯だった。だが俺自身、ずっと説得に来てくれていた委員長に惹かれていたのは事実だったからな。

頬を朱に染め焦点が定まらない委員長をどうしようもなく可愛いと思った。

が、ふとした瞬間、それも一変して

「じゃあ最初に御免こうむるなんて言ったのは私の心を弄んだわけ！？冗談じゃないわよ！」

問い詰めようとしてくる彼女から逃げるべく立ち上がって素早く高台から飛び降りる。

「まあそっかッかすんなよ。もうすぐ授業始まるぞ、未来」

「……ちよっ、待ちなさいよ、光一！」

二人して昇降口を駆け抜ける。



四日前と変わらないやり取りと少し変わった関係。未来となら授業に出るのも悪くないだろう。学校も少しだけ楽しくなりそうだった。少しだけ……な。

T o B e C o n t i n u e d . . . . ?

（後書き）

読了感謝いたします。我ながらこれを課題として提出するのはどうかと思いましたが時間も無くやってしまいました。反省は・・・してるかなあ。引きつぱくなっていますが続くかは謎、文化祭編は書くかもしれません。まったく別のものかもしれませんが次回作があるならまた会いましょう。ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5331d/>

---

説得までの四日間

2010年11月10日10時55分発行